大学だより

・新入生保護者からの教育研究振興資金報告

４月1日入学式後の保護者会説明会でお願いしましたところ、250万円（28名/50口）のご協力をいただくことができました、ここに厚く御礼申し上げます。

・大学設立30周年記念事業

平成28年度にむけて、記念事業として、講演会・記念誌制作を始めていきます。

・いわき市在住浪江町民健康支援活動

日本赤十字看護大学では、日本赤十字社本社と協働して、いわき市に避難されている福島県浪江町民の支援事業を平成24年度から実施しています。特に事業の拠点として設置された「日赤なみえ保健室」では、日常的な健康相談のほか町民を招いたサロンを定期的に開催して、住民の絆作りを支援しています。

浪江町の馬場町長（左）と高田学長（右）

ママサロンの様子

・スウェーデン赤十字大学交換学生

毎年２名の学生が約１か月間、スウェーデンの看護事情を英語で実習しながら実践的に学んでいます。

・交換学生協定の締結

今年度、タイのチュラロンコン大学およびスイスのラ・ソース大学との協定を交わし、グローバル化の推進を図っています。

学生の活動

・大学オープンキャンパス活動

今年度は７月・８月・10月に３回のオープンキャンパスを開催し、述べ約1,507名の高校生他受験対象者（昨年度は1,553名、付添者786名）とその付添者1,355名が来学しました。学生広報部会との協力で、より学生目線による学生主体の企画を実施しました。

内容としては、「キャンパスツアー」（学生中心に20名前後の来学者を引率する学内案内）や「Student's Café」（学生による入試相談）などが盛況でした。また、「赤十字コーナー」（赤十字活動全般の紹介）や国際交流・災害支援の諸活動に興味を示した方々が多くいらっしゃいました。

なお、学生が企画した参加記念品の「クルトガ」（シャープペンシル）も来学者に好評でした。

・日赤六看護大学交流会

今年度５回目となる日赤六看護大学交流会は、８月21日～22日に日本赤十字秋田看護大学において「災害看護と赤十字」をテーマに開催されました。東日本大震災において救護活動を実際に行った看護師さんから体験談を聞き、救護活動時のナースの役割について知ることができ、また、グループディスカッションでは活発な意見交換を行い、ナースの役割、赤十字の役割について改めて考えることができたと、参加学生から報告がありました。

・クラブ・サークル活動

今年度夏季休暇に、海外において２つのサークルがボランティア活動を行いました。NACEFは13名の学生が８月に10日間カンボジアに行き、孤児院の子どもたちに手洗いの大切さ、歯みがきの仕方等の保健指導を行いました。Hinaharapは22名の学生が３グループに分かれ、１週間ずつフィリピンに行き、現地の子どもたちと遊びを通して交流を図る等、活動を行いました。国内においては、SKV（災害救護ボランティアサークル）36名の学生が８月に５日間、山田町包括支援センター（岩手県）主催で行った仮設住宅の住民対象の健康教育にボランティアスタッフとして活動しました。

日本赤十字看護大学
保護者会報(第６号)

発行日　2015年２月
発行者　日本赤十字看護大学
保護者会

〒150-0012　東京都渋谷区広尾4-1-3
日本赤十字看護大学広尾キャンパス内
保護者会事務局（月曜日・水曜日　10：00-15：00）
［Tel］03-3409-1757　［E-mail］hogosyaj@redcross.ac.jp

日本赤十字看護大学保護者会報(第６号)2015年２月

保護者会会長に就任して

保護者会会長　野村（のむら）　幸弘（ゆきひろ）

本年度保護者会総会にて、前任の高城会長の後を継ぎ４代会長を拝命致しました。どうぞ宜しくお願い致します。また、皆様の保護者会活動へのご理解とご協力に対し改めて感謝申し上げます。

急激に進む少子高齢者社会や医療の高度化において、看護師の重要度は年々大きくなって来ています。私はこの看護師の分野に、既に本学の卒業生として長女を、次いで三女を送り出すことにささやかな誇りを感じています。また、陰ながら応援して行きたいと思っています。そして、この親の思いを明確な形にしたのが保護者会であるとの考えを持っています。

さて、本会も設立６年目を迎え、学生生活や課外活動の支援を目的として、様々な活動に取り組んできました。具体的には国家試験対策模擬試験の実施、奨学金付与、災害救援物資備蓄への支援、予防接種、講演会および書籍、備品補助等です。今年度は災害救援物資の備蓄が一息ついたところですので、昨年度以上に国家試験対策の充実を図って行きたいと思います。

私は保護者会役員に参加して３年目になりますが、この間を通して少し気になることがあります。それは、総会への実参加者が少なく、大部分の方が委任状での参加となっていることです。毎日の多忙な生活の中からの時間捻出や遠方から参加を考慮すると、現在の参加率が精一杯なのかもしれません。しかし、時にはわが子の通う大学に足を踏み入れ大学の空気を肌で感じ、大学の近況および学生生活の状況を先生方から直接お聞きするのも悪くないと思います。また、懇談会では皆さんの苦労話を聞き、保護者同士で語らうのも良いものと思います。更に、保護者会で取り組んで欲しい活動や意見を述べて頂くことを役員全員が待ち望んでいます。

最後になりますが、学生の皆さんがこの伝統ある日本赤十字看護大学から、一人でも多く全世界に派遣されること願って止みません。そのため、微力ながら保護者会では出来る限りのことを支援させて頂く所存です。

保護者会費の内容についてご理解を

副会長　宮下（みやした）　裕子（ひろこ）

保護者の皆様には、日頃より保護者会の活動にご理解を頂き、ありがとうございます。今年度、副会長を務めさせて頂いております、宮下と申します。役員にと、お声をかけて頂きましたので、お役にたつことができるならと、保護者会の役員をお引き受けして３年がたちました。

学生の皆さんも、日々、勉学と実習に励んでおりますので、実り多い学生生活となるようにと願っております。そして、誰一人欠けることなく在学生全員が無事に国家試験に合格し、患者様に寄り添うことのできる一人前の看護師となれるように、私達保護者会も微力ながら、サポートしていきたいと考えております。保護者の皆様も、どうかこの会報をお読み下さり、総会に足を運んで下さいますよう、お願い致します。

毎年、学費と一緒に保護者会に保護者の皆様から２万円の寄付をお願いしております。この貴重な２万円は単なる寄付ではなく、実習に参加するには不可欠なインフルエンザとＢ型肝炎の予防接種、国家試験模試や国家試験対策講座、コミュニケーション・マナー講座の講習会、学業困難な学生にたいして保護者会からの返金不要な奨学支援金、海外留学の支援金、各学生に配付してあります災害時の非常食などの費用に使用しております。

また、インフルエンザの予防接種は全学年、Ｂ型肝炎の予防接種は１年生全員と、まとまって大学で受けますので、各自で受けるよりは費用もお安く、大学での接種ですので手間もかかりません。

会費の内容を何とぞご理解いただき、皆様には保護者会の総会などで、ぜひ、ご意見、ご要望をお聞かせいただきたく存じます。

保護者会では、学生の皆さんが、卒業して振り返った時に、学びやすいよい大学だったと思えるように支援を行い、そして、将来さまざまな場で活躍できる看護師になれるように願っております。

日本赤十字看護大学 看護・実践・教育・研究フロンティアセンターのご紹介

日本赤十字看護大学　学部長・フロンティアセンター長　守田（もりた）　美奈子（みなこ）

保護者会の皆様には本学の教育へのご理解とご支援を賜り、厚く御礼を申し上げます。

日本赤十字看護大学には、学部、大学院の他に、看護実践・教育・研究フロンティアセンター（以下、フロンティアセンター）が置かれています。「フロンティアセンターは、日本赤十字看護大学がこれまで蓄積してきた看護の知的・実践的なノウハウを社会へと還元し、実践・教育・研究の３つを統合しながら、広く人々の心身の健康を維持し発展させていくための場です」（本学HPより引用）。主に看護職を対象にした研修プログラムを提供し、学術的な交流を行うための拠点として平成17年に開設しました。今年で10年を迎えますので、この場をお借りして保護者の皆様方に活動経過をご報告させて頂きます。

フロンティアセンターでは開設時から、認定看護師資格を取得できるための教育課程を運営してきました。認定看護師は日本看護協会（日本最大の看護職能団体）から資格を得て、臨床現場で活躍する看護のスペシャリストです。この資格を取得するためには半年間以上の研修を受けなければなりません。本学では、感染看護、がん化学療法看護、皮膚・排泄ケア、糖尿病看護、認知症看護、慢性呼吸器疾患看護の６つのコースを運営し、2014年までに866名の修了生を輩出しました。2014年の段階で765名（2013年）の認定看護師が誕生しております。2014年度の修了生が資格審査に合格するとこの人数はさらに増える予定です。本学を修了した認定看護師は全国の医療機関で活躍しており、これまでの教育により臨床看護の質の向上に一定の貢献ができたと考えております。そこで2015年からは、この課程を一旦休止することに致しました。今後は、大学院での専門看護師の育成に、さらに力を注いでいく予定です。

フロンティアセンターでは卒業生を支援し、大学と医療機関の連携を強めるための多様な教育プログラムも行っています。具体的には、実習指導に携わる臨床現場の看護職（臨床指導者）を対象とした研修会を運営していきます。このプログラムは、2013年から実施してきましたが、参加者や医療機関からの評価も高かったので、更に内容を充実させ毎年開催していく予定です。この研修を受けた看護職が増えることで、実習施設での臨床実習指導の質が向上することが期待できます。また大学と臨床現場をつなぐ継続教育の在り方について学び合うセミナーも行っています。新人看護師が現場にスムーズに適応し、看護師として成長することを支援するための継続教育は、大学と医療機関等の臨床現場が連携して実施していくことが求められています。セミナーでは継続教育をどのように行うのか等の教育的な課題を取り上げ、大学教員と医療機関の管理者、教育者等が共に学び合っています。

また、広尾地区にある日本赤十字社医療センターや総合福祉施設レクロス、乳児院、日本赤十字社助産師学校、幹部看護師研修センター等との連携を強め、看護研究や実践を行うことを目指して「ケアリングフロンティア広尾」という組織を、2013年に立ち上げました。ここでは、赤十字の看護職のネットワークを生かして、「リサーチフェスタ（研究報告会）」や、広尾地区のお祭りである「桜フェスタ」、あるいは腎不全医療における地域一体型モデルの構築を目指す「TRC研究会（トータルリーナルケア研究会）」、地域の高齢者が参加する「My turn プロジェクト」、「病院と在宅をつなぐ中間施設における看護のあり方を考える研究会」、「人々の持っている力をできるだけ発揮して病気と付き合う能力を高めることを支援する看護のあり方を検討する」、「セルフケア能力を高める支援の検討会」、などのプロジェクトチームが作られ、教員や現場の看護職とが協力し合って様々な研究や実践活動を行っています。

フロンティアセミナーの重要な活動の一つに、武蔵野地域防災セミナーがあります。地域住民と大学の教職員、学生とが一体になり地域防災に関して学ぶためのセミナーを10年間実施してきました。武蔵野市との提携で実施してきた歴史を持っていますが、今後はここで得た知見を広尾地区でも展開できるような計画を「ケアリングフロンティア広尾」で検討しています。「ケアリングフロンティア広尾」の活動は、今後は広尾地区だけでなく、渋谷地区や近隣の大学、赤十字関連施設との交流や連携を広げることで、さらに充実させていきたいと考えております。

またフロンティアセンターの付属施設として、福島県いわき市に「なみえ保健室」を設置しています。2011年の東日本大震災後には、大学でも学生による募金活動や、教職員、学生による現地での様々な支援活動等を行いました。災害発生から４年が経過しますが、東北の復興は遅々として進まず、地元住民の人々はなお、仮設住宅等での生活を強いられています。なかでも福島県浪江町は、福島第一原子力発電所事故の影響を受け、多くの住民が全国に分散して避難したという特徴をもつ地域です。日本赤十字看護大学は、日本赤十字社及び浪江町と連携し、2012年から福島県いわき市に住む浪江町住民の方々の健康調査と支援活動に取り組んできました。町民の方々は借り上げアパート等に住み、孤立して生活している人が多く健康不安を抱えている町民が多いと推測されたからです。2015年１月現在も、「なみえ保健室」には、全国の赤十字病院から看護師が派遣され、大学による運営のもと、長期に渡り避難生活を強いられていらっしゃる浪江町住民の方の健康支援活動に取り組んでいます。被災地で起こる健康上の問題は、時間の経過と共に軽減するというよりも、心の問題のように、その深刻さが浮き彫りになる面もあります。このような実態調査の結果を関係各所に示していくことも、「なみえ保健室」の重要な役割だと認識しています。

このようにフロンティアセンターでは、様々な活動を行っています。地域に貢献し、人々の心身の健康に貢献できることがセンターの活動の目的です。それだけでなく、卒業生が生涯を通して学び続けられるような教育や研究機能の一部を担うこともセンターの重要な役割です。フロンティアセンターがさらに発展していけることで、在学生や卒業生の学びの場の拡張に繋がると考えています。

保護者の皆様にも、大学、大学院に加え、フロンティアセンターの活動へのご理解、ご支援を頂けますよう、今後とも何卒よろしくお願い致します。

オーストラリア語学研修に参加して

１年　山本（やまもと）　優花（ゆか）

入学当初から楽しみにしていたオーストラリア語学研修。普段の英語の学習とは異なり現地の生きた英語に触れることで、英語力を身につけるだけでなく、自分の視野を広げられる絶好の機会になるのではないかと考え、この語学研修に参加させていただきました。

私が訪れた研修先はオーストラリアのメルボルンです。メルボルンは歴史的な建造物や文化が多く残り、独特な雰囲気が印象的な街でした。有名な歴史ある観光名所も多く軒を連ね、その荘厳とした空気感にはとても魅了されました。

夏休み中の語学研修だったため、南半球であるオーストラリアの季節は日本とは真逆の冬。これから三週間、英語に囲まれた生活の中で自分は上手く意志疎通できるのか、いざ現地に到着してみると期待よりも不安の方が大きくなり、日本が恋しくなったことを今でも覚えています。

私のホームステイ先は60代のご夫婦とタイの留学生の３人が暮らすファミリーでした。緊張で笑顔もぎこちなかった私を温かく迎えてくれ、ファミリーの優しい人柄にとても落ち着きました。休日は私の念願だったコアラとカンガルーを直接触ることのできる動物園やチョコレート工場、ショッピングセンターにも行き、思い出に残る毎日を送ることが出来ました。

モナッシュ大学での授業はレベル別に分かれた15人程度のクラス構成でした。中国やタイ、サウジアラビアからの留学生が多く、皆授業に対して積極的で、英語を勉強するには最高の雰囲気だったと思います。休み時間には各国の挨拶や簡単な言葉を教えあい、とても盛り上がりました。最初は国による発音の違いから、言葉の壁を感じ、話しにくいと感じる部分も多くありましたが、英語上達という１つの目標に向けて切磋琢磨する仲間との時間は私にとってとても刺激になり、少しずつ距離を縮めることができました。今でも連絡を取り合い、英語での会話を続けています。

日本では感じることのできないオーストラリアでの空気感を実際に肌で感じ、多くの国籍の人と出会い、他国の文化に触れることが出来たことは、私にたくさんの知識や経験、勇気を与えてくれました。かけがえのない、たくさんの充実した３週間を過ごすことができ、このような貴重な機会を与えてくれた方々、そして支えてくれた家族に感謝しています。ありがとうございました。

キャロリングに参加して

２年　田中（たなか）　良明（よしあき）

キャロリングとは、明かりを灯したキャンドルを持って、クリスマスキャロルを歌いながら患者さんやこどもにクリスマスカードを配ることです。おもに一年生が隣にある医療センターや乳児院内をまわります。

今年、最も苦労したのはクリスマスカード製作でした。例年よりキャロリングする場所が増え、一年生の目標とする製作枚数は800枚になりました。全体メールや呼びかけをしながら製作を進めたのですが、なかなか集まりませんでした。キャロリングの５日前になっても集まった枚数は半分にも満たない300枚ほどでした。私は、こんなことでは、間に合わないと判断し、大学全体に呼びかけようとしました。ところが、数人の一年生から、「私たちの学年だけでやりたい」と言われました。不安でしたが、認めることにしました。すると前日までに目標の800枚すべてが間に合いました。仲間を信じて任せてみることの大切さを学びました。

私は、当日に裏方の仕事があったため、キャロリングの列には参加できませんでした。でも逆に、患者さんと一緒にキャロリングを見る機会がありました。昨年に続き、再び感動を味わうことができました。患者さんの中には目を輝かせ、魅入っている方が少なくありません。手を合わせて、「ありがとう！ありがとう！」と、涙を流しながら繰り返し呟いていた人をみかけたことがあります。このような場面に出会うのはまれかもしれません。しかし、多くの一年生は感動的な場面にきっと出会えたことでしょう。

終了後には、多くの一年生から「来年もぜひ参加したい」、「想像以上に感動的なイベントだった」という感想を多くいただきました。一方、前年度に続いて参加した二年生からは、「病棟内以上にケアをしているという気持ちになれるイベントだった」、「こころのケアを学べる時間だった」と、ケアを学んできた二年生ならではの感想を聞くことができました。

キャロリングは参加して初めて、その素晴らしさや感動を味わうことができます。そのため、準備段階では、面倒なことが多く嫌気がさす人が多いです。そのような人たちにキャロリングで出会える感動を伝えるのも委員の役目です。もしかしたら、その人の人生観を変える出会いがあるかもしれませんから。後輩たちにしっかり伝えていこうと思います。